

江戸洒落本に於けるノダロウ

鶴橋 俊宏

はじめに

現代語の共時的研究において、ダロウ・ノ(ン)ダロウの意味記述を試みる論考は盛んであるが、その成立過程についてはまだ明らかにされていない点が多い。特に、ノダロウを歴史的に扱った研究は僅かに土屋信一氏の論¹⁾が管見に入っているのみである。

土屋氏は、『浮世風呂』『浮世床』に見られる活用語承接のダロウ(以下、特に断らなければダロウは活用語承接のものとする)の調査をもとに、ノダロウの出現を文政期以降と結論付けられた。『浮世風呂』『浮世床』にノダロウは無く、現代ではノダロウが用いられる箇所でもダロウが用いられていることを指摘され、ダロウは、もとノを介さない用法のみで、後にノを介すものが現れ、文政期以降ノを介さないものが併立するようになったと述べておられる。しかし、ノダロウはノダの推量形であり、文政期以降にダロウとノダロウの併用が始まるというのは、ノダおよびダロウの出現の時期から離れ過ぎているように思える。そこで、本稿では、ダロウの

用例の豊富な洒落本からノダロウの用例を求め、その用法を検討してみることにする。

一

今回の調査で得られたノダロウの一番早い例は、安永七年『一事千金』に見られるものである。

(1) かつ山 それでもしんそうしが。中の丁でよく見かけなんす
とさ よし大しん そりやアおれに。にたのだらふ かつ山 ぬし
ににた人があれば。いふことはおさんせんけれど。田にし金魚

『一事千金』(安永7) 八76下9T

ここのノは「人」に置き換えが可能である。客が女郎勝山に、新造衆がよく見かけるのは自分に似た他人であるつと言っている例である。このように準体助詞を体言に置き換えられるものは、他に次の例が見られる。

(2) 馬 あんな悪^{あく}芸者をしつちやアうらみださきつから廊下^{ろうか}をい

つたりきたり用もねへに光るがありやアたしかに櫛を買て二日
めでこぜへしやう。犬ウニィンくこりやア見せたからうその
櫛も人の質にをいたのをうけさせてもらつたのだらう。山東京
伝『繁千話』(寛政2) 十五²⁶⁶上¹²K

(3) このふとんも八朔の白むくから二度斗りいるあげをして七ツ
屋のくらげへもとゞ年明までヤツトふとんに変じたのたう。
式亭三馬『客物語』(寛政二) 十七²⁶⁶下¹³

(4) つれ 召物は何だ松葉色の紺かかりてへの地廻 ナアニ大か
た蠅帳を引ツはがしたのだらう。『遊儂窟烟之花』(享和2)
十九¹⁰⁸上⁴T

右の三例のノは、何れも「もの」の意であろう。また次の例は、
現代語では、形式名詞コトに置き換えられる例と思われる。

(5) 吉 おいらんが御馳走をするから。いろとつてさ 風 ソリヤ
ア大かた。御ちそふはしよう。銭はそつちで出せといくなさる
のだろふから。こつしやせう。おめへとたつた二人で。生簀へ
でもめへりやしやう。十辺舎一九。商内神 (享和2) 二十一²⁵
上⁸K

(6) 魯の祖父様も。ぜひあの通りに。覚えやうと。思つて。凡三
月ばかりも。くるしんで食物時も。わすれた事があつたのだら
う。翠原子『楼上三之友』(文政4) 二十六³³⁸上¹

土屋氏は、江戸語のノダ文について、体言の再意識の濃いもの、
形式名詞コトに置き換えられるものが含まれているという事実を指
摘されたが、ノダロウも同じである。

遊子娘言	婦身嘘	船頭部屋	船頭深話	甲駅雪折笹	遊儂窟烟之花	南門鼠帰	八幡鐘	三躰誌	後編にほひ袋	句ひ袋	廓胆競	面美知之婁	玉之帳	意妓口	虚実情の夜桜	南門鼠	松登妓話	品川楊枝	契情買猫之巻	自惚鏡	総籬	福神粹語録	深川新話	書名	
文政3	文政3	文化4	文化3	享和3	享和2か	享和2	享和2	享和2	享和2	享和1	享和1	寛政年間	寛政年間	寛政年間	寛政12	寛政12	寛政12	寛政11	寛政11	天明9	天明7	天明6	安永8	成立年	
鶯蛙楼	墨之山人	猪牙山人(式亭三馬か)	四季山人(式亭三馬)	酒艶堂一醉	青楼薄倖の隠士	塩屋艶二	喜多楼乙息子かはきち	塩屋艶二	塩屋艶二	塩屋艶二	小金あつ丸	南朝山人	関東米	振鷲亭	梅松亭庭鷲	塩屋色主	鸚鵡齋貢	天狗山人芝晋交	梅暮里谷峨	振鷲亭	山東京伝	万象亭	山手の馬鹿人	作者	
	1			2		1		1			1	1		1		1		1						動詞	
			1		1											1							1	形容詞	
1	3	1	1	1			1	3	1	1			1	1								1	1	夕	
															1 レル				1 マヌ	1 ヌ					他

右のような例を除くと、現在までに三十四例のノダロウを得た。表に作品ごとの用例数を、上接語別に掲げておく。

原口裕氏の調査⁵⁾によると、近世後期江戸語におけるダロウは専ら動詞に付き、ダロウが形容詞や過去の夕に付く用法は次代に持ち越される。一方、ノダロウは、表で明らかのように、形容詞や過去の夕に付く例が安永年間から既に見られ、特に夕に付く例は多く見いだされる。上接語に関しては明らかにダロウとはその傾向を異にする。

また、ノダロウに助詞が下接するものは、

ヨ……………(14) (15)

ゼ……………(26)

ノウ……………(37)

ト(引用)……………(35)

で、その他はノダロウで文が終止している。ダロウが確認要求の標識として働くネ・ノを下接する例が多かったことと比較すると、用例数の少なさもあるが、特に目立った傾向は指摘できない。

このように、上接語・下接語に関して言えば、ダロウとノダロウとはその傾向を異にすると見えよう。

以下、それぞれの用例に対して考察を加えていくことにする。

二

田野村忠温氏は現代語のノダロウの用法を、

あることから 背後の事情が であることや、問題の実状が であることを、推量して述べたり、推量や事実についての確認を聞き手に求めたりするのに用いられる。

と説明しておられる。つまり現代語のノダロウの代表的用法は

背後の事情・問題の実状を推量する

確認要求表現

となる。ノダロウは原因・理由を推量する、という説明もある。実際、今回得られた用例も、原因・理由を述べたものが多いが、後掲の用例(22)のように、必ずしも原因・理由だけに限らないようである。

の用法で用いられた例は、安永八年『深川新話』の二例が今回の調査では最も早い⁶⁾。

(7) 安 きのふなんぞも爰で斗り二歳三せへが懸りやした 東 そ
んならきのふみんな釣て仕廻たのだから 安 そんなことだもし
れやせん。『深川新話』(安永8) 八24下9K

(8) 東 ナニサ見給へアレもふきたエ、こつはらな 安 そりやく
わつちが言へ事か 文 あんまり上なさりよつがはやへのだろつ
東 どふも久しく止ていたから調子がしれねへ。

『深川新話』(安永8) 八25上11K

用例(7)は、魚がかからないことについて、「昨日皆釣つてしまつた」と説明し、用例(8)は、かかった魚に逃げられたことについて「竿を」上げるのが早い」とその理由を述べているものと解せられる。

今回得られたノダロウの例は、この意味で用いられたものが多い。以下、その用例を掲げる。引用文に続いて、「あることがら」を
に、「背後の事情・問題の美状」を[▲] ↓に示しておいた。ただし、
は対話に明示されない場合もあるので、あくまでも参
考にとどめる。

- (9) **亭**ときにお前さまとあなた^ぬは。どふもお見かけ申ました
おかほでござります。それく去年浅草の市の時分**夷**盗^ずま
れぬよふに。高い所に見世をはつて居る所を。見たのだから**亭**
ホニ二いかさま。『福神粹語録』(天明6) 十三²⁹⁷下1 K
浅草の市で見かけたような気がする[▲]高いところに店を張つ
ていたのを見た[▼]

天明年間になると、次の(10)(11)のように、[▲] ↓に従属句
を伴う例が見られるようになる。

- (10) **おちせ**玉の井さんはやつぱり仲町に居るかねあの子もふし
やわせだねへ**しあん**そふだそうさ。ちめへだそうだから。そ
ふおふな所をみたてに出て居るのだから。『総籬』(天明7) 十
四⁴²下3 K

玉の井は仲町(深川)に居る[▲]自前(独立して営業するこ
と)なので相応な相手の男を物色しようとして出ている[▼]

- (11) **栄**女房といふよふな事はまだ早いとつて。うちでふ承^{せう}知^ちさ
松し^まそりやああんまりおとなしくしておいでなんすので。
内でもお氣かつきなせんせんのだから。『自惚鏡』(天明9) 十四
315下5 K

家では嫁をもらつのはまだ早いという[▲]品行方正なので氣
が付かない[▼]

- (12) **南**今では双^ま嶼^{うが}も心ぼそいのさ**北**夫れたからお熊^{くま}なぞをば
抱^た込^{こん}て置^あはな**東**女でもこわめのだから。『南門鼠』(寛政12)
十八³²¹下8 K

双嶼がお熊を味方に抱え込んだ[▲]お熊は女だがこわい?[▼]

- (13) **蝶**ソリヤもうおひ出^だすくめんをかんがへるは。行^ゆすへは思
ひやられたもんだぞ。いゝかげんなじぶんにおひだされるのだ
ろつ^{うつく}美しい。おひはぎのよふだ。『虚美情の夜桜』(寛政12)
十八²⁹⁵下15 T

女郎が客を床にやろつとする[▲]しかるべき時になつたら追
い出される[▼]

- (14) **三**酒でものまねへけりやアうまらねへはな内^なで付てくれた
名でもおの字名でなくては土地にふさはねへさつでこんなにく
ろつをするのだからふよ。『意妓口』(寛政年間) 十九¹⁸⁹上3 K
苦勞をする?[▲]名前が悪いから苦勞する[▼]

- (15) **傍**輩^{ばう}ナア二ありやあおえねへすつばかしなお客^お客^{きやく}だはな。せ
んどの晩^{ばん}おそろしくいやみをいつてけいつてからぶつりこね
へわな。そふでもねへとおもつて。舟宿迄あやまつて手紙を出
しておきやしたが。大かたにげたんだからうよ。『玉之帳』(寛政
年間) 十九²²⁸上13 K

客が来なくなつた[▲]逃げた[▼]

- (16) **金**アレみさつし鴨^か居^いの間に巨^き黒^{くろ}土^ど産^{さん}の餅^{もち}花^{はな}かさしてあらア

大方ひるの客きやくのをよくしよら女良か昼飯ひるめしにはつれた時食ときふのたる
うおそれるぜ。『面美知之婢』(寛政年間) 十九 363 上 3 K

餅花が鴨居にさしてある ▲女郎が昼食を食へそこねた時食
へる▼

(17) おめへさんのお出なんしたあくる晚格かつかし子へ藤とうさんか来なんし
てわつちをなふつていろくくな事をいつてから帰なんした真
にくやくしく成ないしたから焼やききせるをおつ付けてやりいした久ソ
リヤア手前にほれたのたらうす よしなんしすかねへヨウ。

『廓胆競』(享和1) 二十四 上 15 K

客がからかった ▲その客はお前にほれた▼

(18) 山イ、エくくそしてマアわたくしがしりぬすまいと思ひな
んして此間もどこへかお出なんしたね太とんだことだだれぞ
にだまされたのたろうおいらはねつからおほへもねへもの。

『匂ひ袋』(享和1) 二十 176 上 12 K

女郎がよその女郎の所に行ったと詰問する ▲誰かにだまさ
れた▼

(19) 山今夜もね。よひに仲ノ丁で秀大夫ひでに逢あひしたならね。次
郎様の事をきかれエしてねそれからいつそ塞ふさひて帰つて参りい
したのさ。そふして文でもかこふとおもつておりいした処へ。
ぬしが来てお出なんすといふ事をきゝぬしたから。いつそ嬉うれし
くつて成りいしなんだつる 今夜御出なんす事をも虫むしが知つた
のざんしよう五 私しも今夜こつちに用の有あるのを。虫むしが知つ
たのだらふ。『後篇にほひ袋』(享和2) 二十一 154 下 1 K

今夜遊郭に來た ▲女郎が自分に言付けをしようとしてい
るのを虫が知らせた▼

(20) 唐 さんならねアノわつちが心意い氣きを作つくておくんなんし。

客人きやくじんの所へやりいすから南 おめエの色男いろおとこの所へやるのたろふ
おらアイやく。『三躰誌』(享和2) 二十一 243 下 4 K

女郎が詩を書いてくれと頼む ▲その詩は情夫にやる▼

(21) 糸 マアそふいつて見りヤアそつさ。夫つましたがモウつちや
らかして置おきまましな日頃ひぐらじじヤア客人きやくじんに出でるのさへいやでなら
ねエもの佐 そんなわからねエ筋すじもねエものだ。客きやくに出でるのが
いやで済すむものか。手前てまへがつがうがわるいからそんな事をいふの
だらう。『南門風婦』(享和2) 二十二 56 上 6

女郎が客の前に出るのは嫌だと言いう ▲自分のつここうが悪い
からそんなことを言いう▼

(22) 素見人 医者いしやくささひ事を云いつちやアあやまるぜいしやくしや
なしにもう一ツいつばいのままつ変挺 ここいいつアああききれれらアあひもじひ
のたろふ。『遊儂窟烟之花』(享和2) 十九 102 下 11 T

酒を飲もうと言いう ▲ひもじい▼

(23) から汁じゆで迎酒むかひをやらかすとはらあんはひは直ちるし又またけへる氣
はなくなるぜ藤 そふさせよふとおもつて売うるのたろう。『甲
駅雪折笹』(享和3) 二十二 243 上 17 T

から汁を飲のむと帰かる氣きがしなくなる ▲帰かる氣きをなくそうと
して売うる▼

(24) 甚 わつちらが女郎衆ぢやうしゆはなんだか内うちにはいつきやせんおふか

たさつまいもでもくつて居るのだろ。『甲駅雪折笹』(享和3) 二十二 251 下 2 T

女郎が自分たちの座敷に來ない ▲薩摩芋でも食べている▼

(25) 逃て今度は伯母の所へもいかれず供達の所へいつたのでさいますのさ其友達がわるものでわつちをたまして愛へよこしたのでさいますよ客そんなら其友達が色男で其為に愛へきたのだろうさのみつらくもあるめへ。『甲駅雪折笹』(享和3) 二十二 261 上 8 T

悪い友達がだまして遊郭によこした ▲その友達は情夫でその男のために遊郭に來た▼

(26) かライかアかこないだあんばいがわるかつたそのだが。どふしてもおれかとおくエはなれているから。物あんじで気やみかてたのたろうぜ。『婦身嘘』(文政3) 二十六 222 上 9

体調が悪くなつた ▲自分が離れているから心配で憂鬱病になつた▼

(27) 勝コレてめへいま大のじへいつたが。おゝかたやじがきたのたろうななんぞといふとつまらねへ事をいうそれどこじやアねへ勝へんぬすみどこであいにいつたがきいてあきれる。

『婦身嘘』(文政3) 二十六 226 上 7
女郎が寢床へ行つた ▲情夫が來た▼

(27) この糸さつさげすみなんすもむりとはおもいせん定めてぜうのねへおそろしい女郎だとぬしと思ひなんせうがこれにはいろくわけがあつてきれいなさなんほしがねへつとめこ

そしていれ義理といふ字にからまれては遊しかたなしにきれのただらう。『遊子娯言』(文政3) 二十六 271 下 12 K

女郎が客と縁を切つた ▲しかたなしに縁を切つた▼

右の用例(28)は、「しかたなしにきれた」全体で▲▼と思われれるが、「きれた」は規定の事実で、推量の対象は、直上の用言よりはむしろ前言を受けた「しかたなしに」の方であると解することができよう。用例(10)(14)も同様に解せられると思う。

三

前掲の田野村氏の説明にもあるように、現代語のノダロウには確認要求の用法がある。田野村氏は推量確認要求と事実確認要求と區別しておられ、推量確認要求にはノダロウが、事実確認要求にはダロウが用いられることが多いと述べておられる。今回の調査では推量確認要求と思われる例のみが見られた。文脈上から見ると、これに該当すると判断されたのは次の例である。

(29) 客手めへこそたれへでもかうして上ますのたらふ女イツソはらが立心までつとめをしてはおりイせんはナ。『契情買猫之巻』(寛政11) 十七 244 上 15 K

(30) つぎ遊さんなんだへ遊なんだへもすさましいおれをおきざりにしてとけへ引こしたまた間男をかせぎにいつたのたろふわるいくせな女だつきわたしがいつまおとこをしたへ。『八幡鐘』(享和2) 二十一 386 上 17 T

(31) 長 マアこんで吞がいノコレためへツちヤア又煮奴で湯桶酒を
くらつて引導前にはづしたんだらう。『船頭深話』(文化3)二
十四 99 上 12 K

(32) 里 けふは両国に会があるからいかにやアならねへない
じゃアねへか。今にあのやるふもけへらアそふするとゆつくり
はなしもできるからいかなくつてよければよしなよ又そふいつ
て外へいくのだろふ。里 ばかアいへ深川に舟はずはつて居て仇
まくらはかわさねへ。『婦身嘘』(文政3)二十六 220 下 10

ただし、文脈上で聞き手の応答を要しているかどうか判断するの
は甚だ困難な例もある。次の例は、単に推量判断を提示しているだ
けとも受け取れる。

(33) 十七の年から女郎を買つて一度もふられた事のねへのだこん
なやたいほねのやせた所へくるとつるがはきためへおりたやう
なものだからおかんであろうめらアふるのではないまごつくの
だらう。『品川楊枝』(寛政11)十七 299 上 5 T

(34) 幸 何さ今さらものをいふほり物じゃアなしそりやアけすな
アおしかアねへがマア何んにしろつらいはさしたゝかあつと思
ひをさせた跡でしたをだしてわらつてしまふのだろふそりやア
あんまりなさけねへぜ。『松登妓話』(寛政12)十八 244 下 14 T
(35) 十 云イ立が地口で。三味線もちつとは弾ますといつて。御
奉公に出たのだらうとわるくいゝはじめると。『にほひ袋』(享
和2)二十一 158 上 8 K

(36) 里 てめへ勝手な女だせ。な わたしのでめへ勝手を今おしり

か。里 とんだ女をしいいこんだそれをきつにして大津美屋で安
くかつたのだろふ。『婦身嘘』(文政3)二十六 220 下 17
吉田金彦氏は、現代語ダロウの用法を説明した中で次のように述
べておられる。

次に、自分が推断したことを、同時に相手を確かめさせる意図
を表す。念押し、質問・反問の意となるものである。これには
相手の応答や同意を要するものと要しないものがあり、文の
イントネーションによって表される。独自のいうときには尻
下がりのイントネーションであるが、相手への働きかけがある
時は尻上がり型のイントネーションになる。

文献から得られる用例を扱う研究方法では、音調による話者の情
意などの情報を得ることはできない。確認要求という聞き手指向性
がどこまで認められるかは難しい問題である。

いずれにせよ、今回の調査では、確認要求のノダロウの出現は寛
政末頃で、早い時期ほど確認要求の例が目立つたダロウとは、この
点でも傾向をことにする。

四

最後に、疑問の語を伴う例を検討する。

確認要求の例と同様、寛政期以降の用例を確認している。疑問の
語を伴うノダロウの例は以下の四例である。

(37) 娘 ヲヤ〜引まみへの猫が出たよどこでかくれてきたのだ

らぶのぶ。『意妓口』(寛政年間か)十九頁下8K

(38) 「二人りして何かしたるか笑ひらつたかを欠行」**巻** 何だかいつて見てきいしよう「下かけ出して行」**五** 何を笑つたのだらぶ。

『にほひ袋』(享和2)二十一頁下9K

(39) 隣のやうな客をとつたらつらいことつたらつもの。ありやアまあ何が面白いのだらう。『船頭深話』(文化3)二十四頁下13K

(40) **うた** おじよせいもなくつてゝおめへさんなによを腹アおたちなさりやしたアノ子もどぶしたのだらう。『船頭部屋』(文化

4)二十四頁上15K

筆者は以前、江戸洒落本にナゼと共起するダロウがあることを指摘したことがある。あらためて次に掲げてみる。

(41) **里風** アしくみさつせへ。田中のほづから。三まいの早かごぐるが。いまじぶんなせあねへに。いそがせるたろつもの**花**

曉ほんに何者だろつものこいつはげせねへはへ。『総離』(天明7)

十四頁下7K

(42) 仲吉さんは、なせおそいだろぶ、はやく、きなはれば、

よいのに。楠下氏『楠下婪夢』(文政10)二十八頁上2

(43) **露笑** なせそねへに野暮をいふだらう。鶯蛙山人『妓娼情子』

(文政年間)二十八頁上15

これらは、現代語ではノダロウが用いられる箇所である。しかし、前に示したとおり、ナゼと共起するノダロウの例は洒落本の調査ではまだ見つからない。

この時代、過去のタにはダロウが付かず、過去推量表現にはタロ

ウが用いられていた。また、広くタロウの用法を調査してはいないが、過去推量表現の場合でも、ナゼ・ドウシテと共起するタロウが見られる。次の例は、反語ではなく原因・理由を推量する例で、何れも現代語ではノダロウが用いられるべき例である。

(44) **甚** 紀伊国屋といへはなぜかわつたらう。『甲駅雪折笹』(享和3)二十二頁下3T

(45) きめつくあぶらもあるがなせきへたらう。『菊黄舎雲裡』(傾城買花角力) (文化1)二十三頁上2

(46) **な** なるかつたね此手ぬぐいは**里** おれがじゃアねへ**な** あつちのやろつものかいやよどぶして持てきたらう。『婦身嘘』(文

政3)二十六頁上1

佐治圭三氏は、疑問の語を伴うノカ文について次のように述べておられる。

疑問の語を伴う「**い**のか」の文は、「**い**」の部分、きまったこととして取り扱われて、疑問が向けられるのは「**い**」の部分にはなくて、疑問の語に対してである

右のダロウ・タロウの例もノカ文と同様に解することが可能と思う。しかし、ノダロウの場合は、直上の用言が「どうする」のように一語的か、疑問の語が用言と格関係をもつものに限られ、ノカ文と同様に解釈できるか検討の余地がある。これは、今回「ナゼノダロウ」の例がみられなかったことと関係があるのではないかと思うが、まだ多くの調査すべき問題が残されている。現時点では、ダロウとノダロウの枠組みが江戸語と現代語とで異なっていたとい

うことの指摘にとどめておく。

おわりに

用例数は少数であるが、安永期のノダロウの用例が確認された。ダロウとノダロウの併用は、ダロウが文献に現れ始めた時期からそれほど遠くない時期に始まっていたと言えよう。ただし、ノダロウの用法を検討すると現代語とは異なる面がある。今回は、ノダロウの出現時期を知ることが目的としたので、この点に関して十分考察を加えることができなかった。ノダロウの用例を更に検討することにも、ダロウやウ・ヨウとの比較、ノダの調査等を積み重ねることが必要である。今後の課題としたい。

注

- (1) 土屋信一「のだろつ」「以前・江戸語の「だろつ」の用法」、『小松英雄博士退官記念 日本語学論集』平成五年七月
- (2) 吉川泰雄先生の調査では、慶安三年没紹益禅師の『碧巖録提唱』にノダがみられる。また、ダロウは、湯沢幸吉郎氏が指摘した小咄本『鹿子餅』（明和九）のダアロウの例が最も早い例である。洒落本では、ノダ・ダロウともに明和年間に見られることが、それぞれ、注（4）論文、注（5）論文で述べられている。体言承接のダロウも、『使者方言』など、明

和期にその例が見られる。また、原口裕氏は、述語に準体助詞が付く用法は近世後期に定着していたと述べておられる。

A 吉川泰雄 形式名詞「の」の成立「日本文学教室」三号（昭和二十五年九月）、『近代語誌』（昭和五十一年三月）所収・角川書店

B 湯沢幸吉郎『増訂江戸言葉の研究』（増訂二版昭和五十六年十一月、初版昭和二十九年四月・明治書院月）

C 原口裕『近世後期語（江戸）』『講座日本語』3所収（昭和五十六年十一月・明治書院）

(3) 調査した洒落本は、注（6）A・B論文で扱ったものである。使用したテキストは、『洒落本大成（中央公論社刊）』で、用例の引用にあたっては、書名（必要に応じて作者名を添えたものもある）・成立年に続いて、ページ・上下・行数を示した。引用文の中、「」を施したのはト書きの部分である。なお、用例の末尾に「K」を付けたものは、国立国会図書館蔵の版本で、「T」を付けたものは都立中央図書館加賀文庫蔵の版本・写本で確認した。

(4) 土屋信一『浮世風呂・浮世床の「のだ」文』『近代語研究第七集』（昭和六十二年二月・武蔵野書院）

(5) 原口裕『江戸語の推量形』『静岡女子大学国文』6（昭和四十八年十一月）

原口氏によると、江戸語において過去はタロウで、形容詞及び形容詞型活用語については、イイやネエのような訛形など活用形が不完備なものに付く例が天明以降見られるようになる、と述べておられる。

(6) A 拙稿『江戸語の推量表現について』明和期寛政期の洒落本を

江戸洒落本に於けるノダロウ

資料として、『野州国文学』46(平成二年十二月)

B 拙稿 江戸語の推量表現について・享和期以降の洒落本に於ける実態・『静岡県立大学短期大学部研究紀要』5(平成四年三月)

(7) 田野村忠温『現代日本語の文法』の「だ」の意味と用法(和泉選書) 平成二年一月

(8) 明和期には、次のようなノデアロウの例がある。

宗 ゆかねばならぬおつしやるがやつぱり酔 ほれてゐるからといふので
あらぶがカノ図づてきたといわれては。作者未詳『南江駅話』(明和7) 五71下 11

(9) 吉田金彦『現代語助動詞の史的研究』(昭和四十六年・明治書院)

(二五六)三五七頁)

(10) 注(6) A論文

(11) 注(6) B論文。注(1)論文にもナゼを伴うダロウの例があがっている。

(12) 佐治圭三『日本語の文法の研究』(平成三年七月・ひつじ書房)(二〇七)二〇八頁)

「一九九七年十月三十日受理」